



川上郁雄・尾関史・太田裕子著

日本語を学ぶ／複言語で育つ 子どものことばを考えるワークブック

くろしお出版、2014年発行、132p.

ISBN : 978-4-87424-635-1

岩崎 典子

1. はじめに

本書は筆頭著者の研究室「川上郁雄研究室」の成果を生かして作成され実際に大学の授業で用いられた教材を基に編集されている。共著者の尾関史氏と太田裕子氏は共に川上郁雄研究室で研究し、2009年に博士論文を執筆され、その後博士論文に基づいた著書を出版された。尾関氏は、『子どもたちはいつ日本語を学ぶのか-複数言語環境を生きる子どもへの教育-』を2013年に、太田氏は『日本語教師の「意味世界」-オーストラリアの子どもに教える教師たちのライフストーリー-』を2010年に出版された。

「ワークブック」という副題が示すように本書は一般の読み物ではなく、(大学の)授業の受講者が複数言語環境にある子どもについてのエピソードや大人のライフストーリーを読んで提示された質問や課題について考え、他の受講生と対話して協働で考察するように作成されている。受講生が主体的に考えることを重視しているため、問いや課題には「正答」はない。実際に授業で用いて試行版を作成し、改良を重ねて出版されたワークブックである。到達目標は、受講者が複言語環境で成長する子どもの現状・アイデンティティ形成や支援について理解するのみならず、21世紀の人や社会のあり方について考えることである。

ますます国境を越えて移動する人々が増加し、小・中・高等学校では「日本語指導の必要な外国人児童」も「日本国籍を有する日本語指導が必要な児童生徒」も増加の傾向にある(文部科学省 初等中等教育局 国際教育課 2013)という現代において¹、「幼児期より複数言語環境で育った子どもたちの学びを日本語教育の視点で考えることをテーマ」とする(p.4)本書の果たす役割は大きい。

本稿では、まず2節で少し解釈を交えながら内容の概略を述べ、3節では本書の意義と課題を議論し、4節では今後の改訂版への期待を述べる。

2. 概要

本書は以下の3つのステージの18回の授業案で構成されている。

第1ステージ：子どもの直面する課題を考える。(第1回～第6回)

第2ステージ：子どもの言葉の学びと実践を考える(第7回～第12回)

第3ステージ：子どものライフコースを考える(第13回～第18回)

第1ステージは川上氏、第2ステージは尾関氏、第3ステージは太田氏がそれぞれ担当し、その全体を川上氏が監修されている。それぞれの著者がこれまで取り組まれてきた課題について担当し、教材が作成されている。各回の最後には、その回で取り上げられている話題に深く関わる用語の紹介と簡単な解説をする「キーワード」というセクションが設けられている。ワークブックの問いかけには「正答」はないものの、「キーワード」の解説には先行研究が示唆する重要な論点が提示されており、現在多くの識者に受け入れられている「答え」のヒントとなっていることもある。

第1ステージは、ドイツのインターナショナル・スクールで板書された子どもたちの両親の出身地と移動した都市のリストの写真を見ながら、なぜ子どもたちの家族が移動してきたのかを考察することで始まる。そして、フィリピンから来日した子どもについてのエピソードから、移動する子どもの直面する課題(例えば、生活言語を習得しても学習言語能力には直結せず、算数など教科の学習は困難であるなど)について考える。ここではJim Cummins(例えば1979²⁾)が提唱した「二言語相互依存の仮説」がキーワードとなっている。また、著者が「ことばの力」と呼ぶ言語能力は単に文字や文法の知識だけではなく、話題、対人関係、目的や伝達手段を考慮してことばを選ぶのに必要な経験や知識など総合的な力であることも課題を通して受講者に考えさせ、解説している。

続いて日本からアメリカに移動し日本語補習校に通う子どもたちについて考える。彼らが英語で数学を学び日本に帰国した場合はどうなるのか。また母親が日本からアメリカに留学して国際結婚をし、アメリカで生まれて補習校に通う子どもが土曜の補習校通いを辛いと思うようになるのは何故なのか。日本語を使わなくなっていく息子を案ずる母のエピソードも通してこのような子どもたちの課題を考える。いったい彼らは何語を使って生活し、自分のアイデンティティについてどのような悩みを持つのか。このような点について考察をした後、母親は日本人で父親はスコットランド系のアメリカ人、そして2歳の時にオーストラリアに移動して大学で日本語を学習した学生、トムソン華さんのスピーチ「私はハナ人」(川上2012からの引用)を読み、移動とことば、そしてアイデンティティについてさらに考える。

このステージの最後の回では、海外でマンガやアニメを通して日本語を習得したために、マンガ特有のことば(例えば「ござる」)や「おまえ」などのことばを使う日本語学習者の会話や、シンガポールで長く過ごした後、日本語と英語を混ぜる「混ぜ語」を使うと気持ちが楽になるという日本人のエピソードを読むなどして、「それぞれの『日本語』」について考察する。ここでは、近年世界各地の言語教育で注目を集めている『ヨーロッパ言語共

通参照枠』(Council of Europe 2001)で提唱される複言語・複文化主義(plurilingualism, pluriculturalism)がキーワードとなっている。

第2ステージの前半は、第1ステージの最後の話題であるアイデンティティと「それぞれの『日本語』」に密接に関わる。どんな人が「バイリンガル」なのか、自分の言語(方言、学習した外国語、母語など)を自分の身体の中に位置付けるとどのような「言語ポートレート」となるのか。それぞれの言語の習得にどのような要因が関わっているかを考察する。複数言語環境で育って来日した子ども(韓国人の父親と日本人の母親を持ち数カ国を移動した子ども、ブラジルから来日した日系ブラジル人の子ども)のエピソードを読んで、それぞれが場所、相手、話題に応じてどのような言語を使っているかを考え、社会的な環境と言語習得の関係を考察する。また、同じく来日した複数言語環境の子どもや日本生まれながら複数言語環境の家庭(日本人の母、オーストラリア人の父)で育つ子どものエピソードを読んで、その子どもたちが自分のそれぞれのことばをどのように捉えているかを考え、彼らのことばへの思いが学習にどのように関係するか、そして、教育でどのように扱うべきかを考察する。

後半では、日本語母語の子どものための漢字教材と日本語を第二言語として学習する子ども向けの漢字教材を比較したり、日本人の子ども向けの国語教科書の文章のどのような点が日本語を母語としない子どもにとって難しいかを考え、わかりやすく書き換えてみたりしながら、日本語の学びを支える教材について具体的に分析したり実際に文章をリライトしたりする。最後の第12回では、中国から来日し公立中学に通う子どものエピソードを読んで、その子どもがどんな「ことばの力」を必要としているのかを判断し、ことばの学びを支えるための言語活動をデザインする。ここでは、第1ステージで話題となった「学習言語能力」も検討する意図があるのではないかと思われる。なお、第10回から第12回までの表題には「ことばの学びを支える」という句が含まれるが、この場合の「ことば」は日本語に限られているようだ。

第3ステージの前半には、川上(2010)、または、川上編(2013)をリライトした、複言語で育った3人の大人たちのライフストーリーが掲載されている。どれも非常に興味深い読み応えのあるライフストーリーである。授業では、彼らの生き方に何が影響を与えたかなどの問いに答えたり、半生の軌跡をグラフにしたり、ライフストーリーを比較して、考察する。ことに3人の大人たちのストーリーから、ことば、アイデンティティ、生き方と国籍との関わりを考える。これに続く授業では、複数言語環境で育った人に実際にインタビューをしてライフストーリーを聴く準備をし、その次の授業ではゲストを招いて、準備した質問をして耳を傾け、メモを取ってライフストーリーを書き、自分の解釈も考察として述べる。最後の第18回の授業では意見交流会と全体の振り返りを行う。まずは、前の授業のライフストーリーについて考えたことを発表して意見交換をし、次にそれまでに複数言語環境で育った子供たちについて学んだことを今後の人生にどのように活かしているかを考える。手順としては、自分を中心に位置付けた「自分マップ」に自分の関わるコミュニティーや人々を描き、どのように関わっていけるかを書き加えて、他の受講生に説明する。

18回の授業案の他に、巻末にはさらに学びたい学生のための参考文献に加え、講師のた

めの各授業デザインの留意点の解説がある。

3. 本書の意義と課題

前述のように、今や複数言語環境で育つ子どもたちの数はますます増加傾向にあり、そういう子ども時代を送った大人の数も当然増えている。従って、学齢期の子どもたちへの支援の必要性はもちろんのこと、複数言語環境で育って大人となった人々のアイデンティティやことばについての理解が多文化共生社会に不可欠である。

そのような背景の中、これまでの国内外の研究成果の知見をわかりやすく紐解きつつ、川上郁雄研究室の豊富な事例研究を参考にして工夫された授業デザインを含む本書は、今後日本語教育を志す学生にとって有意義な教材であることは間違いない。本書は、著者らも述べるように、日本語教育を学ぶ大学生だけではなく、「教員養成課程で将来小学校や中学校などの教員を目指す大学生の授業」や「地域で活躍する日本語ボランティア養成講座」(p.4) などでも利用しうる。実際、ぜひとも初等中等教育の教員を目指す大学生や現役の教員の研修、ボランティア養成にも役立ててもらいたい内容である。

しかし、ボランティア養成や小学校教員養成などの講座でバイリンガル教育という分野には馴染みの薄い講師が担当する場合は、巻末の講師のための「本テキストの授業デザイン」を熟読した上で、著者らの意図を念頭に指導することが望ましい。本書では受講生が様々な意見を交換する協働学習による気づきを目指しているため敢えて「正答」を提示していないが、問いによっては著者らが受講者に知っておいてほしい見解を踏まえた上での答えを意図しているものがある。例えば、『日本語を早く習得するために、家庭でも日本語を使ってください』と保護者に言う指導者がいますが、あなたはどのように考えますか」(p.14) という問いは、一般的に受容されがちなこの助言が実は慎重に議論すべき点だということに気づかせるための問いである。この問いの言い回しからこの指導者の助言は必ずしも妥当でないという著者の意図がほのめかされ、さらにキーワードには「二言語相互依存の仮説」の解説、巻末の講師のための「本テキストの授業デザイン」には、「よく聞かれることですが、必ずしも正しい指導とは言えません」(p.116) とした上で、家庭での第一言語使用の重要性が指摘されていることが明記されている。従って丁寧に読めばその意図がわかるものの、一般に受容されがちな助言であるので、受講生の活発な議論が促されるよう気配りが必要であろう。

また、第6回の「それぞれの『日本語』」の授業の「子どもたちにとって必要な日本語はどんな日本語でしょうか」(p.35) という問いの狙いは、「日本にいる日本人ネイティブの日本語の優位性や規範性だけで、子どもたちの日本語の学びを評価してよいのかということ考える」(p.118) ことであるが、その狙いがどこまで伝わるか疑問も残る。³

第2ステージの後半、特に第10回と第12回は、日本語教育を学ぶ学生を意識している印象があり、初等中等教育の教員を目指す大学生には負担ではないだろうか。巻末(p.126)に今後の改訂の際には意見や提案を参考にするとあるので、ぜひ提案したいのは、具体例やヒントなどを提示して初等中等教育志願者の教職課程でも利用しやすくすることである。

第1ステージから第2ステージへの流れは抜群であるものの、二点ほど内容的なズレを

感じる。第2ステージのエピソードは、日本で日本語教育を考える学生には身近で特に有益であるが、対象を若干狭めてしまった感もある。第1ステージでは日本国内と海外の両方の子どもたちの事例を挙げていて海外で日本語教育に携わる関係者にも大いに参考になるので、第2ステージでも海外の日本語教育関係者も念頭に置いた事例や問いかけを加えられるとよいのではないだろうか。日本で日本語教育を学ぶ受講生の中にも海外で活躍したい学生も少なくないのではないかと思われるので、国内の受講生にとっても海外の事例のエピソードが参考になるだろう。

もう一点は複言語主義の考えが第1ステージで紹介されているものの、「ことばの学びを支える」という際の「ことば」が日本語の学びの支えにとどまっていることである。複数言語の環境で育った子どもたちの複言語的アイデンティティを支えるには、日本語の指導だけにとどまらず、子どもたちの他の言語、例えば、継承言語を含む複言語資源を活用することを奨励し、その豊かさを培って複言語性を育む工夫があってもいいのではないだろうか。

4. 終わりに

本書は、筆頭著者を始め著者3名の研究成果を社会一般に還元する重大な意味を持つ著書である。しかし、表題の『複言語で育つ』の「複言語」が「複数の言語」のことなのか、それとも「混ぜ語」や不均衡さも含む「言語が複合した複言語」なのか疑問が残る。今後、改訂版を作成される際には、子どもたちの複合的な複言語資源としての「ことば」を支援する方策もぜひとも積極的に取り入れていただきたい。そうすれば、「日本語指導が必要な児童」が、確かに日本語指導は必要なものの、実は豊かな言語・文化資源を備える存在であるという認識を高める助けにもなるであろう。

本書の副題は『子どものことばを考えるワークブック』だが、複言語で育った大人たちを理解するためにも大いに役立つワークブックである。ぜひより多くの人々に活用していただきたい。

注

- 1 ここでは、引用した資料で用いられている「外国人児童」、「日本国籍を有する」などのことばを便宜上使用しているが、実際には無国籍の児童や外国籍であっても日本生まれであったり日本国籍の親があったりなど、統計調査には反映されにくい複雑なアイデンティティを持つ子どもたちがいることにも留意する必要があるだろう。
- 2 ここで例として挙げた Cummins (1979) は本稿の筆者が選んで参考に挙げたものである。Cummins氏はJimとJamesのどちらの名も使われており、1979年の論文はJames Cumminsの名で出版されている。
- 3 本稿の筆者は、書き込みのある中古本としてのワークブックを手に入れていたのであるが、その前使用者は様々な問いかけに思慮深いメモをしている受講生であったにもかかわらず、この問いに関しては「正しい言い返し」、すなわち規範に則った日本語が必要だという考えも書いていた。

参考文献

- 太田裕子 (2009) 『日本語教師の「意味世界」-オーストラリアの子どもに教える教師たちのライフストーリー-』 ココ出版
- 尾関史 (2013) 『子どもたちはいつ日本語を学ぶのか -複数言語環境を生きる子どもへの教育-』 ココ出版
- 川上郁雄 (2010) 『私も「移動する子ども」だった』 くろしお出版
- 川上郁雄 (2012) 『移民の子どもたちの言語教育 -オーストラリアの英語学校で学ぶ子どもたち-』 オセアニア出版社
- 川上郁雄 (編) (2013) 『「移動する子ども」という記憶と力 -ことばとアイデンティティ-』 くろしお出版
- 陳天璽 (2013) 「多文化社会の中で育つ、育てる—ことば、家族、社会、そしてアイデンティティ」
川上郁雄 (編) (2013) 『「移動する子ども」という記憶と力』 pp.323-324
- マクマイケル ウィリアム (2013) 「カナダと日本で育った私が震災後の FUKUSHIMA から発信する理由」川上郁雄 (編) (2013) 『「移動する子ども」という記憶と力』くろしお出版、pp.310-322
- 文部科学省 初等中等教育局 国際教育課 (2013) 『資料 1 日本語指導が必要な児童生徒に対する「特別の教育課程」の在り方等について』 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/kaigi/_icsFiles/afieldfile/2013/03/04/1330284_1.pdf
- Council of Europe (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cummins, J. (1979) Linguistic interdependence and the educational development of bilingual children. *Review of Educational Research*, 2, pp. 222-251

(いわさき のりこ ロンドン大学 SOAS 言語学科)